目　　次

○タテのつながりを大切に　―新学部長に訊く―　……　編　集　部　……　1

○57年度生意識調査　……　〃　……　3

○明るさと暗さの交錯　―西条研修レポート―　……　〃　……　8

西条研修　仔猫の眼　……　大牟田　聡　……　10

〃　ついアイスクリームにつられて　……　吉永　文路　……　10

○特集・統合移転を考える

その1　西条キャンパス・カメラルポ　……　編　集　部　……　12

その2　西条工学部生の実態　……　〃　……　14

その3　工学部生は語る

1. 西条新キャンパスでのぼやき　……　櫛田　靖男　……　17

2. 移転って何？　……　木下　浩樹　……　18

○旅　行　記

ソ連見聞録　……　宮崎　三哉　……　19

となりの国，韓国の印象　……　原本美佐枝　……　22

○自由投稿・3・21ヒロシマ行動に参加して　……　橋本　記一　……　24

○学部の記録　……　25

○編集後記　……　28

表紙絵説明

「不滅の栄光公園」の永遠の火

ソ連見聞録（19～22ページ）参照

タテのつながりを大切に

——新学部長に訊く——

編　集　部

わたしたちは，本年4月1日から岡本哲彦教授を総合科学部学部長にお迎えした。先生は学部長としての事務引きつぎや学期初めという甚だご多忙中の処，わたしたちのインタビューの申し入れに快く応じて下さった。

——まず最初に先生のご経歴は？

昭和23年，広島高等師範学校・理科2部（物理・化学科）を卒業，3年間高等学校に務めた後，広島大学理学部物理学科を経て，同大学大学院に進み理学部助手，昭和39年，教養部へ奉職，現在にいたっています。

——ご専門は何ですか？

専門分野は固体物性で，主として磁性関係の研究をしてきました。最近はこれに加えて，エネルギー危機をふまえ，水素エネルギーに関係した水素輸送貯蔵に関する研究を行なっています。

——先生の学生時代と比べて今の学生はどうですか？

総合科学部の学生というのでなく，学生一般のものとして考えて見ますのに，テレビとかのせいかもしれませんが本を読まなくなったのではないかと思います。昔は知識を吸収するものとしては本しかありませんでした。ところが現在ではテレビなど知識を得る手段が多様化しています。昔は善し悪しは別として，むさぼる様に本を読んだように思います。そして読んだ知識を友達同志で互いに話し合ったものです。今の学生にはこれが少ないのではないでしょうか。これが1つ大きな違いであると思います。

もう1つは，総合科学部の学生で私が羨ましいと思いますのは，2・3年生までは基礎知識を幅広く勉強していることです。私が過去を振り返えって見ますと，大学時代には専門，すなわち物理学なら物理学だけしかやっていませんでした。今，社会の要求に応えて学際領域的なことを研究して行こうとする時，やはり新しい分野を研究するには相当の抵抗を感じるわけです。そういう点で今の学生は幅広い勉強をやっている為に，抵抗を感じることなく学際領域の研究がやれるのではないかと思います。

現に，私の研究室の学生も，私が或る学際的な研究を手がけようと思いますと私は先程述べた様な抵抗を感じるのですが，学生はそれを感じることなく研究しているようです。そこに総合科学部の学生の良いところがあるのではないかと思います。

しかし反面，幅広くやっている為に学問が浅くなる心配はあります。4年を卒業した時に何をやったかわからないということがあってはならない。幅広く勉強した上で，その上にこれが自分の専門だということをつかむ，ということが必要なのではないでしょうか。

その為には，他の学部の学生以上に勉強しなければならないと思います。例えば私なら，物理学を4年間やればよかったところを本学部の学生は物理学も化学も生物学もやった上で物理学をマスターしなければなりません。それにもかかわらず，総合科学部の学生はそういう考えが薄いのではないかと心配しています。

——学部あるいは大学のために，これから主に何をしようとお考えですか？

10年一区切といいますが，確かにそうだと思います。私は総合科学部創設当時，学務委員長，コース講座委員長をやったりしました。その時皆さんに，パイオニア精神を持って新しい総合科学部を創ってくれ，ということをお願いしました。この度，私がこういう一区切に学部長になって，はたして10年間で伝統が出来たか，というとまだまだ伝統は浅く，これからも皆さんとともに伝統を培っていかなければならないと思います。総合科学部はこうあるべき

だということを培ってもらいたいと思います。

私が学部長になった使命の一つは大学院の博士課程をつくることだと思っています。これは，学内全体の十分なコンセンサスを得た上で近い将来必ず実現させたいと思っています。

それから，今一つは，現在君たちは非常に狭いところで苦労して勉強しています。アカデミックな空気がない中で勉強しているわけですが，勉強するのにはやはり環境というものも必要ではなかろうかと思います。各コースにおいて研究室もセミナー室も少なく，十分な研究が出来ないと思います。東広島市移転を契機に学生の勉強の環境づくりも行なっていかなければいけないと思っています。

それと同時に，総合科学部では一般教育の責任も負っていますので，一般教育の充実も平行して行なわなければなりません。そこで教官は，学部の学生を教育すると同時に一般教育も十分にやっていかなければならない，２つの使命を持っているわけで，非常に苦労されると思いますが，これも確立させたいと思います。

── 博士課程はどんな制度になるのでしょうか？

博士課程は総合科学部の上にエントツ式につくるのではなく，他学部との協力のもとに新しい博士課程をつくるのです。そして博士課程をつくると同時に，修士課程は発展的に吸収していくことになると思います。

今のところ比較的はっきりしているのは，生物圏科学を総合科学部の環境科学研究科と生物生産学部の農学研究科を中心に，工学部，原医研の協力を得てつくるということです。さらに，工学部と総合科学部の情報系の教官が中心となって，情報科学専攻を工学部の内につくることです。これには理学部からの協力も得られることを期待しています。文学・社会系では，法学研究科，経済学研究科と総合科学部の地域研究の社会系を中心にした，社会科学研究科（法学専攻・経済学専攻・国際科学専攻）をつくろうとしています。もう１つ文学系を中心にした博士課程もこれから文学部と交渉しようとしています。

── 昭和59年に移転出来るでしょうか？

現在は，学長を初めとして，東広島市市長と話をつめています。いま一番大きな問題となっているのは廃水処理問題です。それは廃水処理場をいつ造るか，ということに関連しています。そういう意味では，総合科学部の移転は明確なことはいえませんが，あまり遠いことではないと思います。

総合科学部も今年の６月頃から，移転の骨格の打ち合わせを本部施設部と行なうつもりでいます。

従って，今の１・２年生は必ず移転に関係してきます。移転時には勉強もおろそかになり勝ちなので，今のうちからそのつもりで勉強して下さい。

── 最後に，総合科学部生にひと言お願いします。

立派な総合科学部をつくる為には総合科学部の学生が互いに知り合わなければならないと思います。運動やコンパを通じて，タテのコンタクトもとるようにしてほしいと思います。

その点，今の総合科学部の学生には，不足しているように思います。ヨコのつながりは勿論のことタテのつながりを大切にするようにして下さい。

── お忙しい処，どうも有難うございました。

57年度生意識調査

編　集　部

今年も例年通りに新入生対象のアンケートを行いました。多くの御回答をいただきまして本当にありがとうございました。今回のアンケートは，総科観コース問題，総合移転の３つを柱として，それらのことを57生はどのようにとらえているかを探ってみました。以下のアンケート結果を基にして，57生は自分自身の考えとの相違，また56生以上の方々にも57生との考え方の相違という点に注目して読んでくだされば，いっそう面白く，また57生の意識もよりはっきりとつかめるのではないでしょうか。

ここでこのアンケートを報告するまえに断わっておきたいことがあります。編集部の手落ちのためにアンケート用紙に性別記入欄を入れませんでした。このために男女別の質問に対する集計ができませんでした。あらかじめ御了承ねがいます。

アンケート実施日　５月16，17日
93枚回収

〈Ｑ１〉あなたが総科を受験した理由を次の中から選んで下さい。（複数回答可）

1. 学際的・総合的な研究をしたいから　56人（60.2％）
2. コース決定に１年の猶予があるから　22人（23.7％）
3. 難易度（一次の得点，二次の科目，etc.）　30人（32.2％）
4. 自分の希望する進路に有利だから　15人（16.1％）
5. 広島の街，広大に興味があったから　4人（4.8％）
6. 地理的に近いから　18人（19.4％）
7. 文系から理系・理系から文系への転向が可能　21人（22.6％）
8. その他　7人（7.5％）
   - 経済的にも国立にいきたかった
   - 早くから決めていた
   - 環境がいい
   - 設置講座を見て
   - 情報コース志望だったから
   - めずらしいから
   - 女の子が多いから

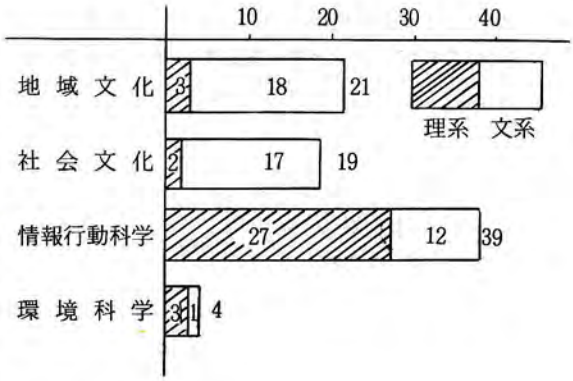
〈Ｑ２〉もし総科以外の学部を選ぶとしたらどこですか。下の中から選んで下さい。（複数回答可）

1. 文学部　33人（35.5％）
2. 理学部　20人（21.5％）
3. 教育学部　26人（28.0％）
4. 法学部　25人（26.9％）
5. 医・歯学部　7人（7.5％）
6. 工学部　13人（14.0％）
7. 経済学部　13人（14.0％）
8. その他　10人（10.8％）
   - 社会学部　3人（3.2％）
   - 農学部　3人（3.2％）
   - 人間科学部　2人（2.2％）
   - 教養学部　1人（1.1％）
   - 薬学部　1人（1.1％）

〈Ｑ３－１〉あなたは文系・理系どちらで受験しましたか。

〈Ｑ３－２〉あなたの志望コースはどこですか。

1 未定　6人
2 複数回答　4人
3 決定　83人



〈Q4〉総合科学部においてはどんな研究がなされていると思っていましたか。また現在はどう思っていますか。

1. 入学前
- わからない，無回答　42人
- 科学を総合的に研究しているところ　22人
- 文・理の区別なく幅広い研究を行う　6人
- 学際的研究を行う　5人
- 専門を持ちつつ，関連分野の研究を行う　4人
- 何でもする（しなければならない）　4人
- 1つのテーマに様々な観点からアプローチがなされている　2人
- 最先端の学問　2人
- 部分の総和は決して全体にはならない事を実証するような研究
- 社会文化は法・経済学部を合わせたようで，地域文化は文学部と変わらないと思っていた
- アジア研究はもう少し東南アジア等のことも研究されていると思った
- 自分の好きな研究
- Computer
- 特別な研究はしていない

2. 現　在
- わからない，わからなくなった。無回答　53人
- （コース決定後は）専門的な研究をする　10人
- あらゆる分野に広く浅く　10人
- 学際的研究，総合的研究　6人
- 他学部と変わらない研究
- 科学する者の総合的集り

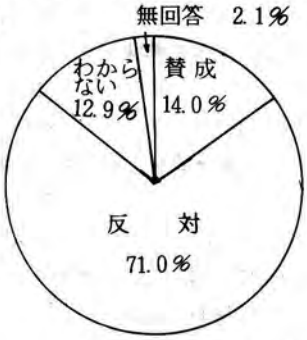
〈Q5〉コース制度があることについて賛成ですか反対ですか。意見がありましたらぜひおきかせください。

1. 賛成意見
- 幅広すぎても困るから
- 希望のコースに行けるなら
- 根無し草であってはいけないと思うから
- もしなければ，どっちつかずになってしまう
- 専門的研究の助けとなる
- 勉強の能率や指針の点でいい
- 定員をもっとふやすならばよい
- どのコースへでも行けるのだから
- 2年次でコースを決められるから

2. 反対意見
- せっかく総合科学という名前がついているのに，結局専門の方しかしないみたいだから
- コースに分かれることにより，他学部の学科とあまり変わらなくなる。廃止してもよい
- 結果的に専門への分化である
- 何のためのコースかわからない
- 理系学科も文系学科も両方やりたい者には障害になる
- 科目選択の幅が狭くなるから
- 志望が2つにまたがる場合障害となる

3. わからない
- コースがあるために好きなことがやれない場合もあるし，コースがなかったら何を系統だててやっているかわからなくなる可能性がある
- まだコースに入っていないので……
- まだ総科自体の実態がよくつかめていないから

〈Q6〉コースに定員があることについて賛成ですか，反対ですか。意見がありましたらおきかせください。

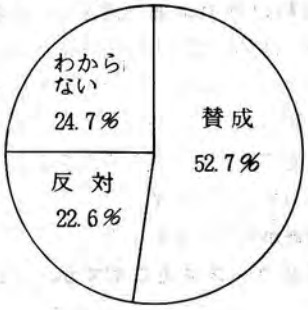


1. 賛成意見
- 教官等に限りがある以上仕方がないと思う

2. 反対意見
- 興味のあるものを全員が学ぶべきだ
- やりたいことをやりたい
- 落ちこぼれが出てくるから
- 好きなコースへ行けない人がいるから
- 現状では仕方がないと思うが，予算があれば定員なしが望ましい
- 自分のやりたい学問ができなくなる可能性がある
- 教官の数に定員数を合わせるのでなく，希望人数に教官の数を合わせるべきだ
- もし希望コース以外に回されたら，何のために来たのかわからない
- 自分の希望を便宜的な理由で変更するのは望ましいことではない
- 反対だけど仕方がないと思う
- これ以上競争するのは受験戦争の続きみたいでいやです
- 要望科目などを取っていても，志望コースにいけない人もいるようだから
- もっと志望者の多いコースの教官を増やすなどの工夫をしてほしい

3. わからない
- できるだけ希望通りに入れてほしい
- もしも希望のコースに入れなかった場合は残念だけど，教授たちの人数等のことも考えれば，やむをえないと思う
- 勉強したい者はやれるだけやらせればよいと思う反面，教授数などの条件を考えればしかたがないと思う

〈Q7〉要望科目があることについて賛成ですか，反対ですか。意見がありましたらおきかせください。



1. 賛成意見
- 学問の上で参考になる
- 基礎知識等として必要
- 本来なら自分で選ぶべき
- 強制はしていないので
- あくまで要望の段階でおわること
- 賛成とも言えない

2. 反対意見
- 選択幅が狭くなる，偏る，しばられる
- 自分の好きなものが取りづらい
- コース決定の一年猶予の意味を考えると反対

〈Q8〉コース決定に1年間の猶予があることについて賛成ですか，反対ですか。意見がありましたらおきかせください。

1. 賛成意見
- 考える時間がある
- 総科のいいところ
- 大学での勉強がわかる
- よりよい選択が可能
- 途中で何があるかわからないから
- もっとあってもよい（猶予期間）
- こんな学部があってもいい
- これがあるから総科に来た
- 事実上あるのかどうか……
- 理系の者にとって猶予があるとは思えない

2. 反対意見
- 2年ほしい
- 一般教養を2年やらせるべき
- あまり意味がない。入学してから2ケ月ぐらいで決めればよい。

3. わからない
- 理系の場合は前期に受ける講議で決まってしまうのでは？

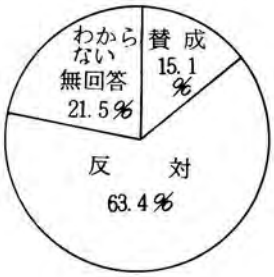
〈Q9〉**入学前に統合移転について知っていましたか。**

1. 知っていた　92人（98.9%）
2. 知らなかった　1人（1.1%）

〈Q9〉で1と答えた人のみ答えてください。あなたは統合移転を何で知りましたか。

・入試募集要綱　・世間の常識　・報道機関
・赤本（受験参考書）　・受験雑誌
・知らないうちに知っていた　・親，友人等

〈Q10〉**統合移転について賛成ですか，反対ですか。理由もおきかせください。**



1. 賛成
・最初の理想が実現されれば
・広島の街は勉強に向いていない。下宿さえなんとかなればすぐにしてほしい。
・キャンパスがきれいになるし，現在のではあまりに狭い
・賛成だが地元との協調，下宿，下水処理等に問題がある
・家から近い
・西条に親戚がいる

2. 反対
・下宿がない　・本屋がない　・銭湯がない
・ディスコがない　・バイトがない
・電車がない　・交通の便がわるい
・下水処理施設が整備されていない
・他学部への移動困難（広いから）
・パチンコ屋がない　・経済的に困難
・学生生活に不安を感じるし，西条住民の反対もある
・キャンパスライフの理想的姿と全く矛盾
・まだ学園都市の機能を果たしていない
・筑波的管理化のおそれあり
・広島市の方が文化的。娯楽施設が充実している
・地域社会に密着した大学が理想だと思うからいくら美術館や博物館を作っても大学がない都市が国際平和都市と呼べるわけがない
・4年間のうち途中で移転するのはむなしい

3. わからない
・設備が充実する点では良いと思うが，市内から離れることでかなり不便になるから，まだどちらともいえない
・実態がつかみきれない
・学生と話し合い，意見を聞くべきである
・管理的になりすぎるのはあんまりよく思わない。しかし反対をいう程でもない。でも，できれば今の広大のままでいてほしい。

1. 学際的・総合的な研究をしたいから…？

考察にはいろうと思う。**Q1**の回答をみると，**学際的・総合的な研究をしたいから**，と答えた人が圧倒的に多く（60.2%）なっています。これを，**自分の希望する進路に有利だから**，と答えた人が比較的少なかった（16.1%）ことと考え合わせると，将来の進路もさることながら，総合科学部での研究内容にかなりの興味を示しているということが言えるでしょう。しかし，その反面，**難易度**，と答えた人が多い（32.2%）ことは注目すべきことだと思います。これは共通一次の得点によって総科以外の学部を断念してしまい，しかたなく来たという人がいることを示しているのではないでしょうか。（**Q2**で教育学部心理学科と書いた人がいたことは，その現れのひとつではないかと思われます。）

また，これは余談ですが，57生の出身地は，北は北海道から南は鹿児島県まで日本中から集っています。このことは新入生の総科への興味と期待とを現しているのでしょう。

2. 文系？理系？……？

Q2 総科以外の学部を選ぶとしたら…の回答で文系学部，理系学部の両方を答えた人が13人と少なかったのは少々期待はずれの感があります。以下の質問への回答と照らし合わせても，文系理系双方にわたる研究ではなく，どちらかを広く研究しようという傾向があるようです。

3. 入学時からコースを…？

Q3 志望コースはどこですか，の質問ではほと

んどの人がコースを決めているという結果が出ました。未定および複数回答は，ほんの10人です。また例年通り**情報行動科学コース**の志望者は多く，93人中39人と既に定員オーバーとなっています。しかし，文系から理系コースへ，理系から文系コースへ志望している人が少数ながらもいることは，総合科学部のメリットを生かしていると言えるのでしょう。

4. 総科ってわからない…。

Q 4 総合科学部においてどんな研究が…の質問に関しては記述式だった為に，かなりの無回答がありました。

入学前においては，広く浅く学問するところだと思っている人が多く見うけられました。また反面，結局従来通りの専門領域を深く研究するところだと思っていた人も少なからずいました。

次に現在においてですが，各コースが意外にはっきりと分けられていることから，他学部同様の専門研究をするところという印象を持った人が多かったようです。

また無回答が多いことや，回答の内容が多種多様なことから，総合科学部をはっきりとつかめていないことが言えるでしょう。

5. コース制には賛成だけど…。

Q 5 コースがあることについて… という質問については，賛成が60人もいたことは**Q 1 で学際的・総合的な研究をしたいから**と答えた人が多かったことと関連してみると少々多いような気がします。(志望コースを大半の人が決めていることから当然かもしれませんが…) しかし，反対意見の中に，他学部の学科同様に専門への分化を危惧するという意見も出ているように簡単には片づけられない問題だと思います。

Q 6 コースに定員があることについて…の質問では，反対が66人と圧倒的多数でした。賛成と答えた人の意見をみてみると，教官数のためしかたないと答えた人が多く，ほぼ全員といっていいほど反対意識をもっていると思ってよいでしょう。

ここでQ 5とQ 6を関連させると，次の表のようになります。

Q 5 ＼ Q 6	賛　成	反　対	わからない
賛　成	8人	44人	8人
反　対	3人	13人	0人
わからない	2人	9人	6人

コース制度は賛成しても，定員については反対だという人がかなりいることがおわかりでしょう。

Q 7 要望科目があることについて…という質問においては賛成が52.9％と過半数を越えています。しかし，要望科目はあくまでも要望であると大部分の人は考えているようで，あまり抵抗はないように感じられます。しかし反対意見の中には，1年のうちからしばられるのはいやだという意見も出ています。

Q 8 コース決定に一年間の猶予があることについて…の質問では，81人の人が賛成でしたが，他学部のように，一般教養を2年終了した後に，専門へ移る方式を取り入れた方がよいという意見が少数ではありますが，いたことは考えるに値することではないでしょうか。…「賛成」票の中にもコース要望科目の点から疑問視している人がいる。

6. えっ／移転を知らない人が!!

Q 9 統合移転について知っていましたかの質問においては，知らなかったと答えた人が1人いたことは驚くべきことではないでしょうか。この人は移転すると知ったとたんどんな気持ちだったのでしょうか。ちなみにこの人は次の質問では，反対と回答しています。

Q 10 統合移転について…の質問においては，反対が63.4％と多く，学生生活に不安を感じている人が，かなりいます。この質問は，身近に迫った問題らしく，いろんな意見が出され，57生も真剣に移転問題を自分の問題としてとらえているように感じられました。

Q 9と**Q 10**を関連させると，**Q 9**で1と答え，**Q 10**で2と答えた人は58人もいます。みんな移転を知って入学したのに，現時点で反対しているということは，移転についての情報不足が原因となっているのではないでしょうか。移転という問題は私たちにとって避けることのできない問題だけに，これからも真剣に取り組んでいくべきでしょう。

以上，アンケートの結果と，それに対する編集部のコメントをまとめてみました。編集部の勝手な解釈もあると思いますが，読者の方々はどのように感じられたでしょうか。57生の意識を少しでもつかんでいただければ，幸いです。

明るさと暗さの交錯

―西条研修レポート―

編　集　部

5月15日午後1時30分，予定より30分程遅れて約90名の総科57生を乗せた2台のバスは西条へ向けて出発しました。バスの中は割と静かでしたが，西条キャンパスにさしかかって，工学部の裏手が総科の予定地だと聞くと，だだっ広い何もない空間にどこからともなく溜め息まじりの歓声(?)があがりました。

研修センターに到着すると，すぐに研修室へはいって，何故か皆にのせられたH君の「ヤングマン」の唄（先生方がはいってこられた為に中断されたのは残念でしたが…）の後，岡本学部長の御挨拶に続いて式部先生の講演がありました。

その後，5時から夕食と入浴――夕食は，男子には少なかったようで，中にはおかわりした御飯に塩をかけて食べた人もいたとか…。

夕食が済むと，7時半までは自由時間です。明日のソフトボール大会に備えてグラウンドで練習した人，その人達を尻目に食堂で明日のソフトボール大会の表彰状の文句をひねり出していたＳＰＴの面々，部屋でおしゃべりの花を咲かせた人など，皆，思い思いに時を過ごしていたようです。ところでここでＳＰＴが何のことだかわからない人も多いと思いますので，少し説明させて頂きます。ＳＰＴとは，西条研修プロジェクトチームの略称で，早い話が各チューターの連絡員のことなのです。ＳＰＴと書かれた赤い腕章をしていた。あれがそうなんですヨ。

7時半からは，文系・理系に別れてのガイダンスがありました。文系・理系ともに，先生方との活発な質疑応答がなされていたようですが，1時間位たってビールとおつまみが出されると，だんだん騒々しくなってきて，文系と理系の部屋を行ったりきたりする人や，食べることの方に熱中する人もでてきたりして，いつの間にか終わっていたという感じで，ガイダンスは終了しました。

その後は，部屋を移して楽しい楽しい宴会の始まりです。学務の窓口の人の何かわけのわからないセリフ入りの歌や，N君の十八番，松山千春の「長い夜」などが次々に飛びだし，宴会は11時頃まで続きました。最後に，恒例の「安芸の国」を唄ったあと，気の合った者同士で2次会となり，ディスコと化した大研修室でヘルシーな汗を流したり，ギターに合わせて大合唱したり，研修センターのまわりへ夜の散歩に出掛けたりして，明け方近くまで起きていた人もあれば，明日のソフトボール大会に響くからと周りの喧嘩を無視して眠りに就いた人もあり，皆それなりに楽しい夜を過ごしたようでした。

翌朝は6時半起床。肌寒いけれど晴天です。これまで雨でソフトが中止になったことが何度かあると聞いていたので，口々に「57生は行ないがいいからネェ」と言いながら，朝食を済ませ，一部を除いて，8時半からチューター別の研修が行われました。しかし，研修とは言っても，どのチューターも簡単に自己紹介など済ませるとグラウンドに飛びだして，ソフトの練習に励んでいたようでした。

11時半から，大急ぎで昼食をとり，いよいよソフトボール大会です。各チームともに，Ｔシャツやハチマキをそろえていて気合は十分！　早速一回戦が

始まりました。1回戦では「大牟田しんちゃいず」対「阿部一族」，「山本みどりＡＮＤ走るＳ」対「もっちゃんカンパニー＆るんるん・イレブン」，「たつみねえさんとそのかわいい子分達」対「森優会」，「森温会」対「ビッグマーメイド」の4試合が組まれていて，勝ったチームは優勝へ向けてどんどん勝ちあがっていき，負けたチームはDOTSUBOへ向けてどんどん転落していくことになっています。DOTSUBOに落ちると，るんるんのトイレ掃除が待っているので，どのチームも真剣そのものでしたが，22対0などという総科史上に残るような試合もありました。（敢えて，どの試合かは言いません）しかし，好ゲームが続出で，結局，優勝：「ビッグマーメイド」，準優勝：「阿部一族」，ブービー賞：「森温会」，DOTSUBO：「山本みどりＡＮＤ走るＳ」と決定いたしました。また，栄えある個人賞には，最優秀選手賞に，優勝に貢献したM君，アンチヒーロー賞に「森優会」との試合で劇的なさよならエラーをしたK君，かわい子ぶりっこ賞に女の子顔負けのかわゆさを披露してくれたT君，ベストファッション賞にみず色のジャージとオレンジ色のレッグウォーマーが何とも言えず素敵だったM君，赤十字賞にアゴにボールを受けてもめげなかったＩさん，スタンドプレー賞に元野球部のH君が輝き，それぞれ豪華賞品を獲得しました。

そして，午後3時半。丸1日お世話になった研修センターをあとに，なつかしい広島へ向けて，来た時と同じバスで出発しました。帰りのバスは，来るときよりも，もっともっと静かで，大半の人が昨晩の疲れとソフトボールの疲れでぐっすり眠っていて，車中には，起きている人が食べるお菓子の音がやけに響いていました。

広大着は5時頃。バスから降りてぐったりしているところに，どこからともなく「『安芸の国』やるぞ」と声がかかり，一同重い足をひきずりながら総科玄関前に集合し，例のごとく円陣組んで，図書館からの冷たい視線にもめげずに唄いました。でも，唄い終わると，さすがにドッと疲れがでました。その後は，チューターごとに打ち上げに散っていき，楽しかった西条研修は，ここに幕を閉じたのでした。

それにしても，たった1泊2日の西条研修の間に，顔と名前が一致する人が増えたということは，大変うれしいことです。西条研修の一番の収穫は，きっとこれだと思います。中には，西条研修の前日まで，ものすごくマイナーだったのに，西条研修の間にメジャーに変身し，今では，研究室のスターになってしまった人もいる程です。〝明るい総科生〟は西条研修で生まれる！　…これを結論にして西条ルポを終わります。

西条研修

仔猫の眼

1年　**大牟田　聡**

ウチの猫が先日，三匹の仔猫を産んだ。（生まれたのが三匹の仔豚なら面白いのだろうが，残念ながら必然的に猫ばかりだった。せめて仔犬を一匹混ぜて貰いたかった！）三匹ともまだ眼も開かず，猫というよりは多分に鼠的である。しかし，日を追って大きくなる彼等を見ていると，なるほど，さすが猫の子，と思わずにはおれない。生意気に爪の生えている脚，おざなりの髪飾りのような耳。何一つとってもまだ完成の域には程遠い。が，その爪がいつの日か鋭く空を切り，その耳が敏感に獲物の動きを捉える様子を思い浮かべたら！　何となく胸がワクワクして来ないかい？

あ，そうそう。西条研修の感想，書かなきゃいけないんですね。

え一と。

まあ，自分としては「動く本部」という，一見響きの良さそうな異名をとり，雑務係として忙殺された二日間だったので，余りエンジョイできなかった——こともなかったが，ま，とにかく総科生の個々のパワーは勿論，集団としての圧倒的なパワーにも目を見開かれる思いだった。僅か二日間であったが，西条を舞台にして，総科生（飽くまで「総科生」であって「総合科学部学生」と呼んだら同じ集団でも違った印象を与えるから要注意）それぞれが主人公となったようだ。その中でも特筆すべき事は，脇役になりきれない人間が，次々主役に抜擢された事—例えばかの薫風寮に寄生している坂井先輩とか，根暗ぶりっ子さわり魔との評価を得た某君（筆者注・本人の名誉の為，敢えて武智君とは書かなかった），その他諸々の人達が，完全にそれまでの評価（先輩など，その存在すら殆んど知られていなかったというから不思議だ）を覆し，その一方では，まだ本性を現していない役者達が，虎視眈々，次の機会（チャンス）を狙っている。今想うと，僅か30時間ほどの〝研修(?)〟ではあったが，フルコースとしてかなり食べ応えがあったような気がする。森利先生発する雷鳴もなかなか迫力に富んでいたし，各ソフトボール・チームの健闘，酒が尽きても尚酔い痴れた，宵闇に広がった美しき斉唱などなど，幸か不幸か，いつまでも記憶に残りそうな気配だ。

——果して他の何処の学部に，入学後一月半であんなに乗れるところがあるんだ！？

三匹の仔猫達も，もう暫くすれば親の庇護下から自分の意志で動き得るという事を知るだろう。ようやく開いた彼等の涼しい眼に，最初に何が映るのか。至れり尽せりの環境から一歩足を踏み出したその瞬間から，今度は自分自身が行動する番である事を彼等は悟る。そうした中での，あの透き通った，いつも何かにちょっと驚いているような仔猫達の眼を想像してみたら！　ね！　何となくワクワクして来ないか？

——もしかしたら俺達も仔猫の眼を持てるかも知れない。

ふと今，そんな事を想ってみたりしている。

ついアイスクリームにつられて

1年　**吉永文路**

野を越え，山を越え，バスに揺らり揺られてやって来ました広島の秘境・奥地西条。話には聞いてはおりましたが，近くを新幹線が通っているのには驚いてしまった。周囲を見渡せば，田んぼと畑と山と，ちらほらと民家があるだけで，その中，「広島大学工学部歓迎」と書かれた垂れ幕が，農協の壁とか，歩道橋にぶら下っているのが，いやに白かった。そして突如として，きちゃない茶色の団地みたいな建物が4つ，我々のどよめきとともに，どーんと目前に現われた。ただ悲惨としか言いようがありませんでした。

さてさて，我々総科の一行は，熊に襲われることなく無事，広大研修センターに到着。その後，学部長の御挨拶，研修センターの使用上注意事項，式部先生のお話しについて述べたいのですが，紙面の都合上省略させていただきます。（本当は，私はぐっすりと眠っていました。すみませんでした。）

夕食をすませてから，理系と文系のコースに分かれて説明会が行なわれた。理系のコースは，女の子も多くて盛り上った明るい雰囲気だったと聞きましたが，文系の方は，暗い子ぶりっ子の武智くんを始めとして，根の暗い人が集まり，場を盛り下げてし

まいました。そのあと，みんな酒を飲んだり，歌を歌ったり，一部では踊り狂い，盛り上がっていたようですが，私の場合，坂井せむぱいとともに，暗く盛り下げてしまったので，あえてこの際省略します。

翌日のソフトボール大会では，私達のチーム「山本みどり　AND　はしるず」は，第一回戦，強敵「もっちゃんカンパニー&ルンルン・イレブン」とあたってしまいました。山本，安田のバッテリーは息も合い，山本みどり投手の好投にもかかわらず，ボコボコと打たれてしまいました。もっちゃんチームのバッターは，なぜか，外野手の守ってないところに，ボールが飛んでいくのです。一方，「はしるず」チームのバッターは，外野手のグローブめざして，ボールを飛ばしてしまいました。このように，実力とは関係なくただ日頃の行ないの結果のみにより惜敗してしまったのです。この試合の敗因は，なんといっても，時本素子投手の好投というか暴投にあったと思われる。彼女の一人につき，約20球を投げ続ける（その日だけで 700 球を投げまくった計算になる。）という，プロ顔負けのスタミナと，ストライクゾーンをわざわざはずして，バッターを疲れ果てさせて，打ち取るという頭脳プレーの前に，我我のチームは，敗けてしまったのです。

それから，山本紳助監督とそのメンバーは，気をとりなおすことなく，準決敗戦に出場。対戦チームは，「大牟田しんちゃいず」チーム。このチームは私達のチームより数段レベルが低く，やる気がうせてしまい，山本監督の，「この試合に勝っても賞品はない。それよりも，この試合に敗けて，どつぼ決定戦で勝ち，ブービー賞のけしゴムを勝ちとろう。」という監督命令と，安田捕手の「この試合に敗けたら，今度は人の前で，プレーができるぞ。」という言葉を信じ，私達のチームは，やっとの思いで敗けることができました。しらじらしいエラーや六振の演技はとてもむつかしく，大牟田チームのエラーなどの障害にもめげずに，見事に敗けることができたのであります。

さてさて，どつぼ決定戦（別名，便所そうじ決定戦）の対戦チームは，「森温会」チーム。このチームは，あの「森優会」にさえ敗けてしまったという暗い過去を引きずっていました。（国生曰く「すみません。」）塩谷チューターと佐伯外野手のじゃんけんは，実力の差で，塩谷チューターは３連勝してしまいました。この時は，じゃんけんの勝利が，相手のチームの最後のお情けであったことに，全く気がつかなかったのです。ちょっと話がそれてしまいましたが，再度，白熱の試合について述べましょう。

ここで，なぜかいきづまってしまいました。人間は，いやなことを忘れたがるものなのです。もう思い出せなくなりました。どうして私が原稿を書かんといけんのでしょうか。ついついアイスクリームをおごってあげるからという言葉につられてしまったのです。西条は暑かった。私は西条研修に行って，人生が変ってしまいました。ほとんど病気になりました。来年は，廃止にしましょう。

どういうわけか，便所そうじは，楽しかったです。汚れたものが，美しく生まれ変わる過程には，人間が本質的に好む浄化作用を含んでいるものと思われます。西条研修を，この観点からながめてみると，この汚れた広島という土地に，１月あまり暮らし，心もすさみ始める頃，緑多い西条に来るということは，あのどつぼ戦で得た便所そうじと同じなのです。このことに一人一人が気づいているとするならば，一人二人の犠牲はあったものの廃止せず，続けるべきなのかもしれません。

野を越え，山を越え，帰ってきました広大へ。そして出ました「安芸の国」。

一、ここは安芸の国，広島の街よ
　　広島の街なら，大学は広大。
　　ーしばらく盛り上がりー
十、広大総科は日本に一つ
　　世界にはばたけ　総科生
　　世界にはばたけ　総科生

Refrain

西条研修　万歳!!

特集

統合移転を考える

編集部

工学部の西条移転の完了とともに，統合移転もいよいよ本格的な段階へ入ろうとしています。『飛翔』では，学生の立場から移転に対する積極的な意見を載せていきたいと思っています。今回は，三部構成の立体的な特集を組んでみました。どの記事も学生の立場から見たもので，この特集が統合移転を考えるきっかけとなればさいわいです。

その1

西条キャンパス・カメラルポ

広島大学の西条統合移転が進む中で，わが総合科学部は，二年後に移転となっています。そこで，筆者を含め「飛翔」学生編集委員は，5月9日（日）快晴に恵まれた中で，移転地西条を訪問しました。

国鉄西条駅よりバスに乗り込み，十数分で終点大学会館前に到着。バスを降り四方を見渡すと，その広大さに圧倒される。現在，我々が通学している本部キャンパスとは比較にならぬスケールである。しかし，ただ広いだけであるという感は免れ得ない。というのも，周囲は工学部の建物を除けば，赤土剥き出しの造成地ばかりであることが原因かもしれない。我々が訪れた時は，造成が終了して間もない頃のようであった。

図書館の前を通って，小高くなった所を上って行くと，大きなビルが4棟，すくっと建っている。外見は，いかにもマンションという風情ではあるが，建築物と周囲の赤土とのコントラストは，非常に印象的である。これが，既に移転を完了した工学部の建物である。階段を上ると，そこは工学部棟四棟をつなぐ通路になっていた。壁の外装は，まだ完全に出来上がっておらず，日曜日だというのにペンキの吹き付けを行なっていた。一つの棟に入ってみると，床にはベニヤ板が敷かれてあった。講義室を覗いてみると，音響設備などが整い，設備はかなり良いようである。

エレベーターに乗り最上階まで行き，更に階段を上って屋上に出る。眼下には，西条キャンパスが一望のもとに見渡せる。空気が澄み気持ちがいい。総合科学部建設予定地では，現在工事が行なわれている様子はなかった。工学部棟を出て，隣接する東福利会館へ足を運んだのだが，あいにく日曜日のため休業で中へ入ることが出来なかった。ここには，民間業者が経営している食堂などがあり，囲りに何もない工学部にとって重要な会館であろう。この会館一階の自販機コーナーらしき所にて食事を取ったが，横では，工事に従事している人達が休息を取り，近くにはブロックが積まれ，ブルドーザーが止まっている。到底楽しく食事をする雰囲気ではない。早々に引き上げ，次は池の上学生宿舎に向うことにした。

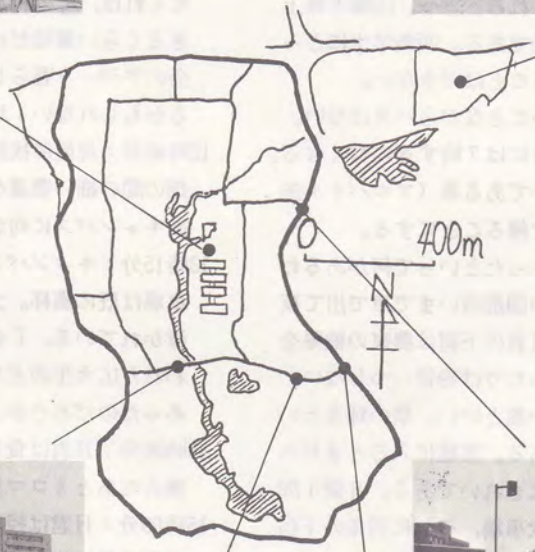
5月とは言え，晴れ渡った埃っぽいアスファルトの道路上は，夏を思わせる熱さである。歩き始めて約20分程で右手にクリーム色をした5階建ての建物が見えて来る。学生宿舎の規模は，棟数7・収容人数320である。道路側から見た宿舎は，冷たい感じを受けるが，裏へ回ると，布団，洗濯物を乾してあり，生活の臭がする。近くには，コインランドリーと自動販売機以外何もない。ここを最後に我々は，バス停山中池よりバスに乗り込み，国鉄八本松駅へと向かった。

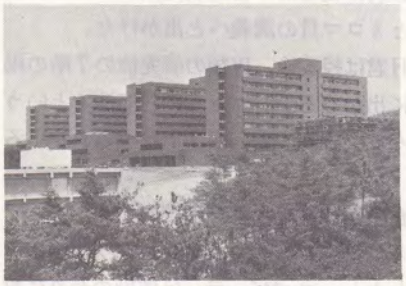
今書いた西条の様子では，相当悲惨なように聞えるでしょう。しかし，筆者は，悲観的にこの西条を見ているわけではない。住み易い，緑のある有益な地に変えて行くのは，建設会社でもなく，大学側でもない，我々学生の手によるものであろう。広島大学が，総合科学部が，世界に飛翔するために約束された土地でありますように。

工学部屋上より，総合科学部予定地を望む

福利厚生施設

学生宿舎





工学部

東口より，望む

バス停　ががら口

中郷線

その2

西条工学部生の実態

記者は，西条キャンパスにおける工学部生の実態に迫るべく，5月16日日曜日夜から，5月17日月曜日夕刻まで，工学部四類4年生のH君の生活を追ってみた。

16日日曜日

22時18分：H君は広島市内のアルバイト先から，広島駅に駆け込んだ。西条にはアルバイトが少ないため週末は今までどおり広島市内でアルバイトをしている。しかし，せっかくのアルバイト代もその多くが交通費に費やされると言う。山陽本線上り最終列車は22時18分発である。西条学生にとって夜遅くまで広島にいることはできない。

23時03分：西条着。当然のことながらバスはない。平日で9時すぎ，日曜日には7時すぎになくなる。H君は西条駅近くに置いてある車（アルバイト先から借りているもの）で帰ることにする。

23時30分：下宿着。腹がへったといって何があるわけでもない。H君は途中国道沿いまで車で出て夜食を買い込んできた。H君の下宿は農家の納屋を改造したものである。あたりは物音一つしない。街明かりもない。涼しい風といい，星の輝きといい，まさに林間学校である。部屋に入るとまだニスの匂いがするが，実にきれいである。8畳1間に2人共同のトイレ，炊事場，それに西条の下宿には欠くことのできない風呂と洗濯機があって，H君の場合，知人の紹介であるため2万2千円。相場は同じ物件で3万5千円程度という。しかし物件が少ないため，大学の紹介する下宿には，遠く瀬野川のものまである。まわりにアパートもできつつある。しかし，寮に入れない限り出費がかさむことは必至だろう。

17日月曜日

1時：H君は自分で沸かした風呂に入り，夜食を食べて，本を読み出した。「こっちは遊ぶものも何もない。夜になったらまわりは静かだし，本でも読むしかない。事実，こっちに来て本を読むようになった。」

2時30分：H君就寝。

11時35分：H君起床。窓からは，のどかな田園風景。

12時：パンと牛乳で朝食。「早く起きてもすることがない。」寝坊を弁解。西条の下宿でも駅周辺とは違い，大学周辺ではゴミの処理がかわっている。燃えるゴミは燃やしてから，生ゴミと一緒に肥料にするそうだ。

12時20分：大家さんが隣りに入る人が決まったと言いにくる。「こっちの大家さんは，どこまで親切にしていいのかわからないみたい。帰ってきたらトイレが掃除してあったり，部屋が掃除されていたり。朝行く時には挨拶して出かけるし，帰ってくれば，その日あったことを報告する。親切すぎるくらい親切だけど，干渉されたくない人，都会のアパート暮らしに慣れた人には，ちょっと困るかもしれない。」

12時45分：母屋に挨拶してからH君は出かける。麦畑の間の細い農道を車で通り，寮の友人を訪ねた後キャンパスに向かう。

13時15分：キャンパス着。駐車場所に困る。仮の駐車場は既に満杯。大学の環状道路にも車が延々と置かれている。「金なし，車なし，女なし」と言われた広大生のどこにこれだけの車を持つ財力があったのだろうか。

13時30分：H君は食堂前の自動販売機でジュースを飲んだあと3コマ目の講義へと出かけた。

15時05分：H君は授業後，Ⅳ類の研究棟の7階の掲示板を見に出かける。「マムシの対処法」という掲示にみんなで読み入る。西条にはマムシが出るのだ。

15時20分：食堂が休みのため，喫茶部でスパゲッティを食べる。景観がよく，高原レストランのようである。しかし，スパゲッティは値段のわりに質が悪い。H君は喫茶部でゆっくりする。「みんなあき時間はこまめに家に帰るんじゃないかなぁ。キャンパスにいたってすることないし，ほとんどのものは車かオートバイを持ってるからね。」とも言う。

16時30分：H君は一度家に帰ったあと，アルバイト先で借りた車でドライブに出かけた。

17時20分：H君に西条駅まで送ってもらい別れた。まことに平凡で退屈なH君の1日でした。

第２部では西条移転に対する不満や賛成意見，さらに問題点を様々な面から追ってみた。

福利厚生面

我々が一番気になるのはこの点かもしれない。まず西条の学生は寮の食堂か，業者の運営する食堂で食べなければならない。なにせキャンパス周辺にはなにもない。西条駅周辺まで行くには車で10分以上かかる。ところで食堂は充実しているだろうか。フロアー面積は工学部生を対象にしたものとすると十分広い。最近は食堂に列をつくることもなくなったという。設備も新しい。食器もきれいである。味も今までと変わらないという。値段的にも多少上がっただけで，以外に不満が少ない。ちなみに主なメニューは，中華そば200円，B定 250円，カツ丼 300円。あまり変わらないという印象を受けたが，ただ業者の食堂ということで，陳列のサンプルに比べ実物が貧弱である。

購買部についてはどうだろう。西条では食堂の下にやはり業者の売店がある。品物は生協と同じくらいそろっているようにみえる。しかし，聞いてみると不満も多い。「業者は売れるものしか置いてくれない」（ある学生），「我々は十数年やってきた経験があるが，業者の方は学生さんの志向を十分につかみきれていないみたい」（生協関係者），といった声が聞かれる。値段面ではどうだろう。「スーパー並みになってます」（売店員）というが多少高いという声も聞かれる。ちなみに，生協電機店舗で 310円のカセットテープが 340円，生協 420円のビニール傘が 460円であった。

福利厚生面で一番不満の多かったのは書籍についてである。ここには書籍売場がないのである。生協が駅の売店程度の規模でほんの少しの本を売っているだけである。専門書など手に入るはずがない。西条周辺までいっても専門書をおいてる店はない。６月１日には生協が大学の敷地を借りて仮店舗を作り，書籍とレコードを売るというが，今のままでは学問の府として恥かしいばかりである。生協は大学と交渉して本部移転までには本店舗を得たいし，購買ルートを拡大したいという。はたしてどうなることやら。しかし，我々学生にとって本もないところで何が研究だ，という素直な不満はでてくる。まわりに何もないところだけに学内の福利厚生には十分な配慮をお願いしたい。

設備面

わざわざ田舎に来るのだから，設備面での向上を期待するのは当然だろう。確かに千田の工学部の木造校舎を見ていると，これが世界の最先端をいく日本のテクノクラート養成機関の一つかと悲しくなる。その点西条キャンパスは近代的である。４つの研究棟といい，それを結ぶペデストリアンデッキといい未来都市のイメージがある。身障者対策，自転車置き場も完備され，実に機能的に作られている。「今までがひどすぎた」（学生），「設備自体，例えば器具などは変わらないけれど，内部は使いやすくなっている。千田にくらべれば研究しやすいし，感じがいいですよ」（機械関係の教官），「少なくとも学生にとっては設備は良くなっているはずだ」（Ｉ類の教官），「千田がひどすぎた。女子トイレもなかった」（女子事務員）といったふうに設備面ではけっこう評判がいい。なるほど実験室などをのぞいていても，広く新しい施設で学生はのびのびしているといったイメージがあった。ただ，４つの類がそれぞれ四つの研究棟に別かれて入っているのを見ると，「あたしゃ建築，あんたは電気」とそれぞれの類が孤立しているように見える。これはあくまで１個人のイメージであるが，全学がこのだだっ広いキャンパスに入ってきた時に，それぞれの学科間での交流は密に保たれるのだろうか。そんな危惧を抱かせる。

研究面

研究面の向上が移転の目的の一つであったのだから，西条へ来て研究はしやすくなったはずである。しかし，実際はそうばかりとはいえないようだ。「実験をしているとどうしても夜遅くまでかかる。でも，夜遅くなるとキャンパス周辺はまっくらになって帰りにくい。寮までの道もまっくら。広島市内から通っているものは，あぶないので実験が遅くなる時は，研究室に泊ってますよ」（電気系修士課程２年）。まだ１ケ月でよくわからないというのが実情のようだが，「あまり変わらない」（機械系学生）というのが大半の意見のようだ。

寮生活

さて寮生活はどうだろう。キャンパス環状道路から森への道を入り，左手に池を見ながら少し坂道をのぼると，寮がある。中に入ってみる。１つのフロアーごとに共同の炊事場，風呂，トイレがある。６人の共同である。実に近代的ではあるが，一歩部屋に入ると驚く。なんと狭いことか。６畳

とはいうが，実に狭く感じる。そこに，スチールの机，本棚，衣装ケースがおいてあるが，もうそれだけでいっぱいである。それ以上冷蔵庫や，コタツでも置こうものなら足の踏み場もなくなる。「主人の若いころは6畳に2人の寮だったけど，時代が違うものねえ。あれじゃあかわいそうよ。それに今の学生さんて，テレビとか，冷蔵庫とかいろんなもの持っているでしょう。あれじゃあ，置き場に困るわねえ」(ある教官夫人)。寮生に寮生活について語ってもらった。「費用は月に2,400円だから安くていいんだけど，買いものが困る。駅前まで出なければならないからね。ここじゃあ車か単車をもってないと絶対に生活なんかできないよ。でも寮に入れるのは1,000人に対して300人ほどだからね」。ここの寮はコインランドリーも食堂もある。だから，あからさまな不満はでていない。「不満を言いだせばきりがない」(機械系学生) この言葉の中には，「もちろん生活はできるよ。でも広島にいた時にくらべれば……」という訴えと，あきらめが入り混じっている。

周辺住民の反応

西条駅を降りて，すぐに目につくのは，「歓迎広島大学」の文字である。反対に，田口地区住民の，下水処理施設建設反対についての報道もある。しかし，周辺住民の反応はきわめて冷静である。「別に変ったということはありません。問題もまだ起きてません」(キャンパス付近の農家)。「何も変ったことはありません。工学部が来るといって期待したほどのことはありません」(八本松からの道路沿いにあるパン屋さん)。田口地区にある農協では「歓迎広島大学」という幕が下がっているが「このあたりは学生さんも少ないし，何も変っていません。問題もありません。せいぜい横の購買部の売り上げが少し上がった程度です」と職員の反応はにぶい。周辺住民の反応がにぶいのは，工学部3・4年生1,000人近くが移ってきただけということや，まだ1ケ月だからということだろう。前述のI類の教官は「まだ変化はないでしょう。総合科学部が来なければ話になりません。一般教育をこっちでやるようになると，それに向けて周辺のお店も増えると思います」と言う。確かに，今の段階ではなんともいえないだろう。しかし，多くの学生が移り住み，友人同士の交流が増えてくると，自動車の騒音も問題になるだろうし，夜遅くまで騒ぐ学生も問題になるだろう。西条は，自給自足的側面の根づよく残る一般的農村である。そこに都市型消費社会に慣れた若い学生が入ってくるのである。問題が生じてもしかたがないかもしれないが，我々はそれを克服していかなければならないのだろう。

まとめ

全体として意外に不満の少ないのに驚いた。自分の置かれた立場を，当然のものとして受けとっているのである。教官ともよく話をするというある業者の人は「学生と社会人の違いというのは，社会人は自分の置かれた立場に自分を順応させられるということです。教官の方々も西条に来たら来たで，西条の生活に自分の生活を合わせておられるようです」というが，社会人のみならず学生の例も同じように考えているようである。まわりの住民も同じである。確かに広大移転は不可避的事実である。しかし，その移転をいかにすばらしいものにするか，という創意なり努力なりが，一部のグループに限られていて，多くの人が無関心であったのは意外だった。それと，今回不満は出なかったが，自宅生の多い広大女子学生の通学についても問題は多い。バスの便は少ないし，夜になるとキャンパス周辺はまっくらになる。これも含めて西条移転の問題は，移転計画が進行するにつれて拡大していくかもしれない。

その3
工学部生は語る

西条新キャンパスでのぼやき

工学部二類・3年　**櫛　田　靖　夫**

「グオー，ガー。」突然の音に目を覚すと，そこは講義室の中であった。前日広島へ行き，今朝早く西条へ帰って来たためか，すこし疲れているみたいだ。「広島に行くのは本当に疲れるなあー。もう広島へ行くのはやめよう。」などと，たわいのないことを考えているうちにも授業はどんどん進んでいく。窓の外では，相変わらずブルドーザーやダンプカーが走り回っている。「ああ，うるさいなあ…。」

そうこうしているうちに，1コマ目の授業が終った。ぞろぞろと野郎どものかたまりが次の教室目指して動いていく。教室へかばんを置くと，友人と一緒に早速食堂（衆望）の食券を買いに行く。なんといってもここの昼の混雑はすごい。チケットを自動販売機で売っているため結構時間がかかるし，自販機が故障でもしようものなら悲惨な目にあう。だから1コマ目の授業が終るとすぐに食券を買いに行くのだ。とは言っても，食堂の混雑は，広島も西条もそんなに違わないかもしれないが…。

食券を買おうとして，僕はふと気づいた。「そうだ，昨日広島へ行ってお金を使い果してしまったんだ。広島まで往復千円以上もかかるしなあ…。」仕方がないので広銀のキャッシュサービスコーナーに行く。広島ならば，大手町か竹屋町に行かねばならないところだが，ここでは大学の福利厚生施設（要するに食堂や売店のあるところ）内にあるのだ。もっともないと困る。なんせ一番近い銀行となると，西条の駅前まで行かないことにはないのだから…。

お金を出すと，メニューの方をちらっと見て食券を買う。しかし，ここの食堂はなんとかならんのかなあー。工学部は学部生，院生，教職員をあわせると，千数百名もいるのにこのメニューの貧弱さ。加えて，「高い」「まずい」「量が少ない」プラス「遅い」の三拍子も四拍子もそろった豪華，絢爛，質素な内容。とは言っても他に食堂はないし，外に出て行くガッツもないのでみんな衆望へ…。

そんなことをやっているうちに授業の開始時刻。授業の始まるのが遅くなった（午前9時）かわりに休憩時間が短くなった（10分）ためなんかあわただしい。

授業が終ると，友人達と一緒にぞろぞろと教室を出てゆく。

「今日も暑いなあ。ビアガーデンに行きたいのお。」「おう，ベルディの屋上にビアガーデンがあるで。行こうか。」「しかし，今，金がないんじゃ。下宿代も払わんといけんし。しかし，西条は金がかかるのお。」―― 彼は，5畳半で炊事，トイレ，風呂すべて共同で，月2万円だそうだ。僕も彼と同じような条件で，少し部屋が広いだけで 25,000円である。広島ならば，25,000円も出せば，陽当り良好で2部屋ぐらいある，すばらしいアパートに住めるのに。寮の1月2,400円と較べてもすごい差がある。しかし僕らはまだいい方かもしれない。この秋，西条へ移って来る2年生なんか，寮はないし，下宿はもっと高くなっているだろうし，なんか悲惨だなあ……。

こういった問題も含め，西条への不満はかなりある。大学内に本屋はないし（近々生協が入るそうだが……）専門書なんかを買おうと思ったら，広島まで行かないとないし，一番近い喫茶店までは，少くとも1㎞，スーパーとなると，2㎞程離れたところにAコープがあるくらい。近くに郵便局はないし，電話となると，寮内（320名）に公衆電話がたったの2つ。不便になったのは，まだたくさんあるが，良くなった点というと，今のところ気づくのは自然が近くなったことぐらいかな？なんといっても大学構内で，カラの仲間やウグイスがさえずり，上空をトビやサシバが舞っている。冬になると，広島にいてはめったにお目にかかれないような珍鳥が現れてくるようなすばらしい環境。それともう1つ。僕の下宿は，西条の町はずれの国道2号線沿いにあるのだが，驚くべきことに，下宿から大学まで，県道を通って行っても信号が1つもないのだ。本当にすごいところだなあー。まあ，こういった不満もだんだん改善されていくことだろう。総科がやってくるころには……。

こんなことを考えながら，結局はいつもの通り，寮の友人のところで時間をつぶし，夕闇のせまる頃

人通りのとだえた，がたがたの田舎道を下宿へと向って帰って行くのであった。

移転って何？

工学部四類・3年　木 下 浩 樹

「一体，何のために西条へ移転するのか？」この事をよく考えて移転してきた学生は大変少ないと思うし，一般の教授の方々もまたよく考えていらっしゃらなかった様である。みんな誰もが，移転するから移転する，といった感じが強い。移転してこれからやるぞ，という建設的な意欲などさらさらない。出るのは愚痴ばかりである。

自分自身，移転に対する期待というと，①新しい校舎に移る事，②オープンスペースの多い緑豊かなキャンパスライフを送る事，③幸運にも入ることが出来た新しい寮で生活する事，といった期待があったが，①は日々の生活にとってそれ程重要な事でなく，②はまだ工事中ということもあって期待はずれ（でも西条の自然はとても素晴しい），③は少々部屋が狭いということを除けば満足，という結果であった。しかし寮に入れなかった人は，もともと西条にあった農業短大生の下宿代は1万円そこそこなのに，2万円以上の家賃を払い，またテレビのうつりが良くないとか，FM放送が入らないとか，食堂がないとか等々問題が多い様である。

食堂といえば，衆望は値段が高くなって量は減ったし，寮の食堂は最初は質量とも良かったが，だんだん質量とも悪くしていくというよくある手段が使われている様である。

食事代や日用雑貨費はすごく高くつく感じがする。それにちょっとした買物でも西条へ出なければならないし，友達の所へ行くにしても，どうしてもバイクか車が必要になり，自分の足はなんとか確保しないと困ったことになりそうである。また，クラブ活動ではやはり広島との情報交換が難しく，広島へ出るのも案外骨が折れる。バス→国鉄→電車で730円かかるし，1時間では行けない。かといってバイクで1時間余り走るのは疲れる。車を持っている人は話が別だが…。とにかくみんな時間も費用も相当負担になっているようである。運動部の人では，4コマ目を休んで夜遅くトンボ帰りなんて例もある。

西条や八本松には「広大工学部歓迎」という看板がよく目につくけれど，地元の人々には期待ととまどいとがあるみたいだ。先日ぼくの友達が工学部の駐車場で若い2人づれに「西条で，でかい顔するな」といっておなかを蹴られるということがあったそうだ。

自分自身の好みとしては，豊かな自然環境のもとで，のんびり暮したいという願望が強いので，ここでの生活の良さを気に入っているが，都会の便利な暮しの方がいいという人も多い。しかし何しろ移転してきたばかりだからこれから西条の都市整備が進み，学校の工事の方も進めば，今よりずっと良くなると思うけれどその頃には卒業しているかも。とにかくその整備に学生が全く参加できないのが一番問題ではないかと思う。

「特集・統合移転を考える」いかがでしたか。

数年後には，わが総合科学部も確実に彼地へ移転するのです。西条研修で初めて西条を知った1年生の諸君は特に驚いたのではないでしょうか。

『飛翔』では，統合移転という未曽有の出来事について，出来るだけ多くの意見を，出来るだけ多くの人に知ってもらいたいと思い，この特集を企画しました。今後も，この企画は引き続きやっていこうと思います。編集部では，この特集に関する御意見・御感想はもちろん，各サークル団体（体育会・文サ・文団・音協等）における，移転に関する研究の成果をもお待ちしています。

（御意見・御感想，原稿等は各学年の学生編集委員（巻末参照）までお願いします。）

旅行記

ソ連見聞録

社会文化コース4年　宮　崎　三　哉

3月5日，ハバロフスク

「郷に入っては郷に従え」と言う。新潟空港からSU696ジェットで2時間半。まず自分たちを出迎えたものは，ハバロフスク空港の検閲であった。

薄汚れたフレームザックとジーパン，そしてパーマがとれかけて収拾のつかないぼさぼさの頭，決して無害な観光旅行者には見えなかったことが禍したのか，とにかく検閲は厳しかった。荷物の中の書物，パンフレット等は全部出すように言われ，一冊一冊調べられた。連れはほとんど調べられずにとっくに通過しているのに，やけに時間をおかけになる。特に自分の列は問題のある者ばかりで，係員総動員する場面もあった。自分の本の中には森村誠一の『悪魔の飽食』もあったが，別に気にはとめていないようだった。あげくの果てにはロシア語の会話集まで調べ出し，同僚を呼んできて，さし絵つきのジョークを読んでは笑っていやがる。自分はただただ怒りをぐっと押えるのみである。この日の晩は，ホテルのレストランでのトラブルもあって，ずっと気分が悪かったのは言うまでもない。

聞いた話だけども，ハバロフスク空港の検閲は一番ゆるいのだそうで，スウェーデンやポーランド方面の検閲だと，フレームザックをしているだけで別室に連れてゆかれ，徹底的に調べられるらしい。ザクトライオンを見て，これは麻薬だろうと疑ってきたという話は，どこまで本当かはわからない。

よく，外国旅行はストレスがたまりやすいと言うが，ソ連にはかのKGBがいるのだ。この最初の洗礼から，明らかに行動制御装置が始動しだしたようである。

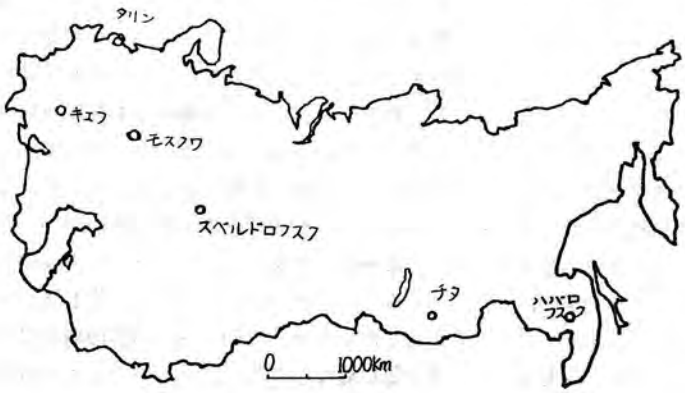
3月11日　シベリア鉄道No.1列車の中で

一日中ほとんど風景に変化のないシベリア鉄道の旅での唯一の楽しみは，見知らぬ者同志が友達になることである。そして一緒にウオッカを飲む。

ふとしたことから知り合いになった隣りの部屋の男たちと酒盛りをすることになった。彼ら4人はエンジニアで，スベルドロフスクまで工場の冷却装置を取り付けにゆくのだそうだ。さすがに広大なソ連では，のんびりした出張ができるわけである。彼らとの話題は，物価問題から政治的な話まで，わりと硬いものが多かったが，やはり下ネタになると国境はなかった。おまけに，ソ連にもいかがわしい写真が裏ではあることを発見したのだった。どこの国でも男とは罪深い存在のようである。

それはそうと彼らはとても酒の勧め上手で，こちらもついつい調子に乗りすぎてしまった。ウオッカと言えば，日本の焼酎，中国の老酒，メキシコのテキーラと並んで，強い酒として有名である。他の酒と同じ様に飲んではならない。まず，黒パンにゆで卵を切ったのと豚の脂身をのせたものを胃袋に入れて，一気にウオッカを飲みほすのだ。ウオッカが終われば，こんどはアルコール分の多いぬるいビールをどんどん飲まされた。どうやら完全に酔っぱらったらしい。それからというもの，自分は日本語でわめいていたと思う。

やっとのことで解放され，自分の部屋のベッドにバタンと倒れると，居合せた3人の女性に同情笑いを受けたのだけは覚えている。そのまま6時間はぐっすり眠りこんだだろうか。もう窓の外は真暗。ふと横を見ると，ベッドのかたわらに，朝から遊びにきていた少年がいた。少年といっても18才で，名前はアンドリー・ヴロスコフ，身長180cmはゆうにある。髪の長いブロンドの少年である。彼とは朝からオセロをやった。なにぶんソ連にはオセロと



いう遊びはないので，やり方を教えてからの対戦で，当り前の話であるが，5戦やって5回大勝，うち3回はパーフェクトゲームであった。彼は工科大学で地質学を学んでいるとのことだ。英語は少々でき，そして学生らしく好奇心旺盛で，日本語を教えてくれと言ってきた。さっそく，まずひらがなを教え，次に自分たちの姓名をひらがな，カタカナ，漢字で書いて見せた。そして最後に彼の名を“安鳥風呂巣故布”と書いてあげた。そう言えば，となりの連中に日本語の「ありがとう」を教えたら，自分の顔を見ればアリガトウを連発していたのを思い出す。

3月20日　キエフ

ウラジミールの丘から見おろすドニエプルは，うっすらとかすみがかっていた。別に写真をとるほどのものではない。たしかこの丘の下にメトロ（地下鉄）の駅があったことに気づき，それで不滅の栄光の公園まで行ってみようと思った。さっそく下ってみると，いい案配に運賃2カペイク（約7円）のケーブルカーがあって，それでゆっくりメトロの入口まで降りていった。下に到着して外に出ると，待ちうけていたようにドニエプルから冷たい風がふきつけた。そう言えば朝からコーヒーとパン以外何も食べていなかったので，売店でピロシキでも買って晩まで食いつなごうと思って行ってみると，ちようど3時から4時までの休み時間であった。隣りでは1杯40カペイク（約140円）で，ビールがジョッキーで売られていたが，すき腹にこたえるので見あわせた。

そんな時，港の方から軍靴が聞えてきた。カッ，カッ，カッ，……。ソ連海軍が隊列を成して行進してきたのである。例のロシア風の毛皮の黒い帽子に黒の丈の長いマント風の上着，そしてラッパの黒ズボン。もちろん肩には銃剣をかついでいる。数人の士官に誘導される形で，総勢50名くらいの若い兵隊たちが訓練に勤しんでいるのである。さすがに迫力がある。カッ，カッ，カッ，カッ，……。軍靴は高らかに鳴り響く。

ちようど自分との距離は20メートルくらい。もう少しで自分の正面を通り過ぎる。チャンスだ！タブーを犯すスリルを感じながら，すかさずカメラを取り出し，おもむろにシヤッターを押した。そしてすぐポケットにおさめた。その時である。士官の1人の目がキラリッと光ったのだ。ドキッ！その瞬間，自分の顔から血の気はうせた。みんな前方を向いて行進していたし，自分の動作も手落ちはなかったはずである。カメラが自動巻きであることを除いては。

彼はそのまま10歩くらい歩いただろうか。くるっと身を翻して，案の上自分の方にやってくるのである。ソ連では軍事的色彩を帯びたものはすべて撮影禁止で，即フィルム没収であることは前々から知っていたが，まさに今，そのタブーが実証されようとしているのだ。それも自分の目の前で。えてして現実というものは，そのリアリティさが増すにつれ，自らを架空の世界に追いやってしまうものである。時間というものは一瞬のうちに消えさり，あらかじめ用意されたシナリオ通りに事は運ばれてゆく。もはや，そのシナリオから脱け出すことは不可能なのである。それでも脱け出そうとすれば，後に待ち受けているものは強制送還である。たぶん彼が自分の方に近づいてくる時，彼の目には顔をひきつらせて立ちすくんでいる日本人の姿が映ったに違いない。彼は言った。「カメラを出せ」と。こういった緊迫した状況の下では，ロシア語がわからなくても，その口ぶりや表情，そしてその場の雰囲気で相手の言っていることがわかるものである。以後は自分と彼とのやりとりである。言うまでもなく，彼はロシア語，自分は日本語でしゃべっている。「カメラを出せ！」「カメラだって？」「知らばっくれるな。おまえのポケットにあるカメラだ。出せ！」しぶしぶカメラを出す。「おまえは俺たちを写したろ」「写したよ。あれ，いけないの？」「当り前だ。さっさとフィルムを出さないか。」「僕は日本人だ。」「そんなことはどうでもいい。早く出せ！」「やっぱりだめ？僕はツーリストだけど。」「だめだ，だめだ。」

ついに観念してフィルムを巻き上げる。このフィルムには，きょうの朝までいたタリン（バルト海を臨むエストニア共和国の首都で，北欧調の町並みが実に美しい）での思い出がある。フィルムをとろとろと巻き上げるほんのわずかな時間に，思い出は頭の中を駆けめぐる。――それはなに気なく入った消防博物館での，思わぬ歓迎であった。2～3分の消防の映画を見たあと，博物館の人から感想を書くように言われた。別にたいした映画でもなかったので，何を書いていいのか戸惑っていた。それでしかたなく自分たちは日本から来たと言ったら，そのおやっさん急に目の色変えて，奥へすっとんでいった。大声で「おーい，日本人がいるぞー。」と同僚に叫んでいるみたいであった。もともと消防士で，今は現役引退したのであろう60くらいの体の頑丈な人で，よほど毎日暇なんだろう。そのおやっさんのはしゃぎ

ようったらありゃしない。同僚と２人で後ろからノートをのぞきこむ。日本語で書き出すと，またはしゃぎ出す。２人はぞくぞくしながら「おい，見てみろよ，漢字だ，漢字だ。ハハッ，おもしろい字で書いているじゃないか。」と言いながら見守っているみたいだった。例の人はドイツ語が少々でき，ロシア語とチャンポンで，「君たちはこの博物館に来た最初の日本人だ。」と言った。自分は日本語でこう書いた。"タリンはソ連の中で最も美しい町の一つだと思います。自分たちは，日本のヒロシマからやってきた学生です。世界が平和であることを心から祈ります。"そう書き終えると，彼はそのノートを持ち上げ，満足そうにそれをながめていた。内容を今度は自分たちがかたことのドイツ語で説明すると，改めて真反対の国，日本からはるばる自分たちがやってきたことに感服していた。たぶんこのおやっさん，夕方にはどこかのカフェで，自分たちのことを話題にすることだろうし，当分話のタネに事欠かないであろう。そんなことを考えながら，彼の実に懇切丁寧な館内の説明を聞いてまわった。最後に館内に遊びにきていた子供たちと記念写真をとり，固く握手して別れたのだった。「話のタネをありがとう。」と言いたそうに，おやっさんは上機嫌で見送ってくれたのだった。――「早くせんか！」と言う例の士官の声で，また現実に引きもどされてしまった。

「早く出せ！隊が向うで待っているんだ。」と，やたらにせかす。そんなこと知ったことかと思いつつやっと巻き終わって，フィルムをカメラから取り出し，そして彼に手渡した。カートリッジをながめながら彼は「このフィルムは，どうやって取り出すんだ。」と聞くのだが，もう自分にはどうでもいいことで，投げ遣りに「ここをこじあけろ！」と日本語で言ってやった。そしたら彼は納得したのか，初めて穏やかな顔を見せて，「ハラショー。」と，ただ一言だけ口にして，すごすごと隊列にもどっていった。もう自分としては，この上なくおもしろくない。「この野郎！何がハラショーだ。」と心の中で吐き出しながらここにいるのもバツが悪いので，反対の方向へ足を進めていった。

だが腹は立っても腹は減る。ころあいを見て，また元の場所へひきかえしてみる。売店でピロシキを買ってメトロに向かおうとすると，突然口笛が胸を刺す。どうやら現場でビールを飲んでいた人たちが自分をひやかしているらしい。ニタニタ笑っている者もいれば，手を振る者もいる。向き直って自分は愛想笑いを試みたが，たぶん相当引きつった笑い顔だったことだろう。

とぼとぼとメトロの段階を降り，不滅の栄光の公園のある，ドニエプル駅に向かった。被害妄想はどんどん募り，どうやら前の駅からドニエプル駅まで尾行して来たと思われる，10才くらいの少年が，もしかしたらＫＧＢのまわし者ではなかろうかと思ったほどだ（実はそうだったりして）。後ろを振り返える度に，彼は目をそらせる。もういい加減にしてほしい。

不滅の栄光の公園は，小高い丘の上にある。（と言うよりもキエフの町全体が丘の上にあるのだが）。公園に至る道を通っていたら大まわりになるので，半ばやけくそで最短距離の林の中に踏みこんでいった。それでも５分くらいは登っただろうか。何やら塔らしいものが見えてくる。泥だらけになったブーツを木の葉できれいにして，一目散に塔へと向かってゆく。30メートルはあるだろうか。夕日を背にした灰色の花崗岩の塔のシルエットは，打ちひしがれた自分の心にはあまりにも堂々と，そびえ立っていた。塔のてっぺんから地上に目を降ろすと，４人の男子のピオネールが銃を両手でかかえて，正面にある，銅製の花環の中で燃えている永遠の火を見守っていた。この塔の真下には幾多の無名戦士が眠っている。1941年夏，ナチス，ドイツ軍が開戦と同時にいちはやくウクライナに侵入し，キエフでは1943年11月６日に，ソ連軍に奪回されるまで，市民20万人が殺されたのだ。ソ連全体で1,800万人もの命が犠牲になった第２次世界大戦は，決して過去のこととして忘れ去り得ない意味を現在も引きづっている。

感慨ひとしおの自分の目の前を，結婚式を終えたばかりの一組のカップルが通りすぎる。新婦はまだウエディングドレスを着たままで，（お色直しをす

るのは商魂逞しい日本だけだが）二人とも永遠の火の前で立ち止まり，花束を捧げて深くこうべをたれる。彼らは永遠の火の前で，何を祈ったのだろう。そして何を誓ったのだろう。静寂の中，その場から感じられるのは命のこだまだけである。２人の門出に幸いあれ。

３月26日　　帰りの飛行機の中で

総じてソ連旅行は，まだみんなにお勧めできる状況ではないことを言っておこう。もちろん物見遊山というか，いわゆる観光旅行とか，ロシアの芸術やロマノフ王朝の遺産に興味ある人とか，レーニンを拝みに行きたい人とか（ソ連当局は泣いて喜ぶだろうが），ロシア語を練習したいとかいった人は，行ってみる価値はあるだろうが，ソ連人と交流を持ちたいとか，ソ連の人はどんな生活をしているのか知りたいとか，民衆のありのままの姿，普段の生活を写真にとりたいとかいった野心を持っている人にとっては，その閉鎖性にうんざりすることであろう。

もちろんソ連の民衆が悪いわけではない。そういった仕組みになっているのだから。やはり言葉の問題は大きいことは言うまでもないが，せっかくシベリア鉄道の旅で知り合いになり，彼らから是非自分

たちの家に立ち寄るように言ってくれた時，外国人は外国人専用のホテルに，それも出発する前に指定されたホテルに収容されなければならないという規則のために，その思いがけない好意を丁重に断らなければならない現実がそこにあるのだ。シベリア鉄道の途中のチタにある家に招待した当人たちも，そういった規則があることを全然知らなかったのだ。

思うに，本当の世界の友好とは，外国人がある国を訪れた時，その国の人が本音の部分に，その異邦人を触れさせることから始まるのではなかろうか。

そんな日が来たら，もう一度ソ連に行ってみたいと思う。そしてそんな日が遠からずやって来ることを信じて，この旅の終わりとしたい。

となりの国、韓国の印象

地域文化コース３年　**原　本　美佐枝**

この春休みに，私はワンダーフォーゲル部の活動の一つとして韓国に行った。韓国といっても広く，おもに行ったところは釜山と済州島である。二週間ばかりの旅行であったが，初めての海外旅行ゆえ，興味深いことばかりで，何から書こうかと迷ってしまう次第なのである。

船の中から見た釜山は，まさに近代的というべき高いビルがたちならび，その上の看板の暗号のような文字がとても印象的であった。また，釜山大橋の赤く美しいのが海の色と微妙なコントラストをなしていた。

釜山でとてもおもしろく感じたのは買い物である。国際市場で野菜，肉などを買ったのだが，こちらが覚えたての韓国語で，「ムー，チョセヨ。」と大根を指さすと，「大根ね，あんたら日本から来たのかね。」なんて言われ，ずっこけてしまった。また，肉屋さんにはびっくりしてしまった。鳥のまる焼き（頭のてっぺんから足の先まで，まさに「とりはだ」であったが，）がずらっと並べてあったり，豚肉をたのむと，豚の頭ごとを出してきて切ってくれたりして気持ち悪い思いをしたのである。

釜山の町に比べ，済州島は，日本でいう「田舎」であり，自然の美しいところである。島の中央には漢拏山（ハンナサン）がそびえ，それは日本の富士山のごとくすそ野が広がり，ふもとの黄色い菜の花畑とわらぶき屋根の家と調和し，絶妙なる景色であった。

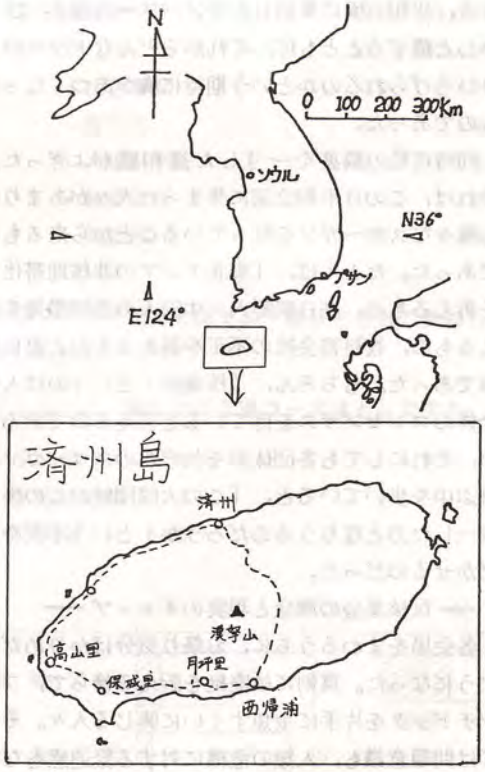
私たちは済州島の村を歩き，人家を訪ね，村の人たちと話をすることを目的として，西帰浦（ソギポ）から高山（コウザン）里（リ）まで，（途中，バスを使ったが）歩いていった。どの村にも，日本語の話せる方がいらっしゃって，あまり不自由な思いをすることもなかったのである。また，私たちが日本人だとわかると，めずらしがっ

て話しかけてくるのだった。時には，こちらがほとんど韓国語を理解できないとわかっているのに，身ぶり，手ぶりで何とかわからせようとしている人もいた。月坪里（ウオルピョンリ）の村で幕営していた時，そこの子どもたちと友だちになり，韓国語を教えてもらったりしていた。その夜，彼らが帰ってしまってしばらくすると，彼らの親が私たちのところへやってきて，じっと私たちを見つめ，話しをしている。こちらの察っするところでは，私たちがこの村に来たということは大事件なのであろう。案の定，次の日，村内放送が流れ，もちろん，何がはなされているのかわからなかったが，「日本の大学生」ということばがはっきりとわかった。

保城里（ポソンリ）の村では，里長さんのお宅で里長さんから韓国の歴史を教わったりした。ある教会の牧師さんから，韓国の文化と日本の文化はどのくらい差があるかとか，どのようにすれば日本に追いつけるかとか，在日韓国人はみんなと遅れないようにやっているかとか……など質問された。韓国人にとって日本の状態が目標なのであろうか。私たちは急にこんな質問をされ，答えにこまってしまったものだった。一般的に，「人は会社のために働き，会社は国の発展のために貢献する。そうすれば，国全体が向上していく。」という考えを韓国人はもっているようだ。

村里歩きを終え，済州市に出てきた時，済州大学の学生に出会い，大学を案内していただいた。韓国では大学のことを「大学校」といい，学部のことを「大学」と呼ぶそうである。海洋科学大学の先生たちと話をしていて，私たちが広島大学の学生ですというと，生物生産学部のことを知っておられた。済州大学校の人文大学には日本語学科があり，その先生は筑波大学からはるばるこられた方ということをきき，紹介していただいた。その先生との話しによると，韓国の男子学生は30ケ月の兵役が義務で，兵役から帰った後も大学に戻り，学生生活を続けるので，勉強を忘れてしまっている人もいるらしい。それに大学生といっても25才ぐらいの人も多い。また，韓国はひどい学歴社会で，大学を出ている人とそうでない人の給料が倍ぐらいちがうらしい。ことばに関しては，韓国人は日本語の「つ」の発音をにがてとしているとか……。（とはいえ，韓国語の方が，日本人に発音のしにくいものが多くあるのだが）

済州島は小さな島であったが，そこに住む人のいろいろな側面を見ることができ，とても興味深かった。釜山，済州島とせまい範囲でしかこの国を見れなかったが，自分が普通に思っていることがこの国にとって異常であったり，また，その反対もあったりする。もちろん似かよっている面も多く見られた。だが，韓国は最も近い外国であるにかかわらず，知らないことが多いなあと感じた。正確にいうと，ほとんどの人が知ろうとしていないのである。私はこの旅行を通してもう一つ視野が広がったような気がする。貴重な体験だったと思っている。



自由投稿

3.21ヒロシマ行動に参加して

社会文化コース2年　橋　本　記　一

すでに新聞，雑誌等で報道ずみではあるが，3月21日，「82年平和のためのヒロシマ行動」が平和公園その他の会場で催された。遅ればせながら私も一個人としての感想を述べてみたい。

――平和のための大移動とある種の違和感――

当日正午，すでに会場を埋めつくした人で身動きがとれないほどであった。あちこちに「大阪自治労」とか「墨田教組」とかののぼりが立っている。全国各地から，平和のために人々は大移動してきたのだ。それだけではない。当日平和公園に集まった人々は，実に様々な立場の人々である。労働組合から新左翼，婦人団体，部落解放同盟と。9万人とも19万人とも言われた，雑多な立場の人々を見ていると，今さらのように核廃絶というテーマの投げかける問題の大きさ，平和公園に集結したマンパワーの強さ，ひしひしと感ずるとともに，これからどんなドラマがくりひろげられるのかという期待に胸があつくなったものであった。

同時に私の脳裏を一寸した違和感がよぎった。それは，この日平和公園に集まった人々があまりにも様々なスローガンを持っていることから来るものであった。たとえば，「東北アジアの非核地帯化」を訴えるもの，在日朝鮮人・中国人の差別撤廃を訴えるもの，教科書会社の不正を訴えるものと実に様様であった。もちろん，「核廃絶」というのは人類全体のコンセンサスを得ていると言えるのであろうが，それにしても各団体がそれぞれのスローガンを叫ぶ中を歩いていると，「この大同団結がこの後も統一した力となりうるのだろうか」という不安をいだかせるのだった。

―― 反核集会の理念と現実のギャップ ――

各会場をまわるうちに，お祭り気分ばかりめだつようになった。真剣に核廃絶を訴える傍らで，フレンチドックを片手に金魚すくいに興じる人々。そこには問題意識も，人類の危機に対する緊迫感もない。核廃絶のゼッケンだけが異様に揺れていた。

もう一つは若者の力強さを感じなかったことである。自分も若者の一人だということを知っていながらあえて言わせてもらう。かつてのこういう運動は若者が中心ではなかっただろうか。今は違う。運動の中心は組合に入っている中高年層である。キルケゴールに言わせると「分別の時代」ということになるのだろうか。我々若者は，変に分別くさくなったようである。「そんなことしても何の役にも立たないよ。いいじゃないの幸福なんだから」そんな声が何処からともなく聞こえてきそうである。我々はどうも，今日が昨日と同じく平和であったように，明日も今日と同じく平和であると考えがちである。

事実，平和公園その他で空前の大集会が開かれているころ，本通りはいつもの日曜日と全く変わらないようすであった。いつもと同じくらいの人がショッピングに興じ，若者は書店でマンガに読みふける。中央通りでは，サル回しに人だかりができ，広島版"竹の子族"が踊り狂っている。一週間前の日曜日となんら変らない様子である。集会会場で危機を訴える人々。「平和」に埋もれ「平和」に麻痺してしまった人々。市内某電気店舗でラジオの生放送のインタビューに答えたある人は，「広島に来るいい機会だと思ってきました。明日は宮島を見て帰ります。」と集会参加理由を語った。反核の討論がなされている最中，一部の参加者は，ショッピングや市内観光へと出かけた。胸にさげたゼッケンと手にもっているヨーヨーとのアンバランスはいったい何だろう。

――大同団結の亀裂――

核廃絶について立場の違い，方法論の違いが現われたのが，閉会間際にスピーチ広場でおきた乱闘騒ぎであった。「観念論をいくら繰りひろげても意味がない。我々はソ連のＳＳ20に反対すべきだ。」と叫ぶ青年に，顔をくしゃくしゃにして「岩国にあるアメリカの核はどうなるんだ。」と泣きわめく老婆。青年を舞台から引きずり降ろそうとする係員と，それに抵抗する青年たちの仲間。ヤジや怒号がとびかい，崇高なはずの「核廃絶」のテーマもかき消されるような醜態に，妨害に来た右翼もあっけにとられていたのを思いだす。これは，観念的討議でそれぞれの団体の利害対立を回避してきたことの一つの破綻ではなかったろうか。

当日午後6時。すでに刷りあがった『朝日新聞』の号外は「唯一の被爆国の核兵器廃絶を願う市民運動は確かなスタートを切った」と成功を伝え，主催

者側もフィナーレで成功宣言をした。しかし，本当に確かなスタートなのだろうか。理念的に結びついた19万人とも９万人ともいわれる人々が，この日の集会以後，具体的手段の違いをめぐって瓦解してしまうのではないかという不安が，ぬぐいきれない。

「平和のためのヒロシマ行動」における理想と現実のギャップは大きい。ただ問題提起だけをして，無責任な傍観者は平和公園を去ったのである。

編　集　後　記

今年もまた，新しい学生編集委員を迎え，皆様の手に「飛翔」をお届けできることになりました。当初，先生方の委員会において，年間2回の発刊を予定されましたが，学生側の意見も入れ，とりあえず今年は従前どおり，年間3回発刊を維持しました。「こんなもの，読みもしないのに，2回でも3回でも変わりはしない」とか，「やはり，あの時に年2回にしておけばよかった」などと云われないように，そして学生からも教官・事務からも「早く次号が読みたい」と思っていただけるように，編集委員一同気持もあらたに，面白い紙面づくりをしていきたいと思います。

そのためには，我々の仕事もそうですが，それと同様にあるいはそれ以上に読者の皆様の意識（具体的には，自由投稿等による討論の場としての「飛翔」の活用）が必要なのではないでしょうか。

最後になりましたが，22号に原稿をおよせいただいた皆さま，どうもありがとうございました。紙面を通してお礼申し上げます。

昭和57年度「飛翔」編　集　委　員

教官　高橋規矩（外国語）三浦省五（外国語）
山下彰一（社会）　藤原武弘（情報）
堀　信行（環境）

学生　55生　松浦　豊（社会）　大原高志（環境）
雲井　司（情報）　廣谷義明（社会）
56生　井上亮一（社会）　隠岐幸枝（社会）
桐木淳二（社会）　高上佳子（環境）
56生　竹下　斉（情報）　戸田友子（地域）
橋本記一（社会）　山田順二（社会）
57生　阿部由幸　小田貴之
川野秀夫　重本知子
嶋田奈穂子　清水律子
永井庸輔　濱村寿紀

事務　村中　博　内田精二